

## 創業150年 玉光山陶器製造場の開業とその時代

主任学芸専門員 深港 恭子

### はじめに 十二代沈壽官の登場

この秋、大阪・関西万博の開催を記念して和泉市久保惣記念美術館で開催されている「Over The Waves ―南蛮・万博・ジャポニスム―」に十二代沈壽官作《色絵金襴手花卉文大瓶》が出陳されている。明治26（1893）年のシカゴ万博に出品された本作は、国内に唯一現存する薩摩焼の万博出品作である。



色絵金襴手花卉文大瓶、十二代沈壽官  
東京国立博物館蔵 Image:TNM Image Archives

そして今年は十二代沈壽官（1835-1906）が明治8年に玉光山陶器製造場（現沈壽官窯）を創業して150年にあたる。個人経営による最古の薩摩焼窯元である沈壽官の創業は、藩の統制下で育まれた生産体制の終焉と深く関わっている。この視点から、当時の状況と創業に至った経緯を振り返ってみたい。

### ウィリスとサトウが関心を寄せた薩摩焼

イギリス公使館の医官であったウィリアム・ウィリスと通訳官のアーネスト・サトウは、生麦事件の検死に立ち合い、薩英戦争ではアーガス号に乗船、渦中の人となった。その後ウィリスは西郷隆盛らの招きで来鹿し鹿児島医学校を建設する。鹿児島と縁の深い二人は、薩摩焼にもそれぞれに関心を寄せた。

ウィリスは明治5年、自ら薩摩焼の輸出を試み、ロンドンのクリスティ・マンソン社と委託販売契約を結ぶ。ウィリスの言によれば、当時の薩摩焼は「来るウィーン万博にも大量に出品される予定であり、日本の磁器の中で最高級品とみなされているもの」であった。1867年のパリ万博以来の世界的人気を好機ととらえてのことだろうが、結果は散々であった。国際貿易は素人が容易に稼げるほど生易しいものではなかったのである。

一方、鹿児島視察の命を帯び来鹿したサトウは西南戦争直前の明治10年2月、苗代川を訪ね、苗代川陶器会社と沈壽官の窯場を視察している。サトウは、苗代川で白薩摩を製造しているのはこの2か所だけだとし、沈壽官の工房では職工が観音像、達磨像、二尺五寸（約76cm）の虎の像を作るのを目にし、後に「薩摩の朝鮮人陶工」と題して日本アジア協会で発表した。

### 苗代川陶器会社の設立と瓦解

明治9年2月、大久保利通は三条実美に提出した内国勸業博覧会開催についての建言書の中で、「無根の巷説に眩惑せられて製品時宜に適せず乃ち薩の陶工の如き是れ也」と薩摩焼の失策を厳しく指摘している。これは廃藩置県後、藩の窯場を受け継

ぎ設立された苗代川陶器会社を指してのことであろう。

苗代川陶器会社は一時盛んに錦手陶器を製造し輸出したが、アメリカ留学から帰国した前田献吉（前田正名の弟）の提言を入れて展開した製品の不適当により、明治8年には資金回収が滞り瓦解同然の状況に陥った。実務にあたっていた木脇啓四郎は前田の見当相違いにより「神戸、横浜等、并ニ支那上海へも渡海いたし候へ共、思う通無之」と記している。これに加え、運営を担っていた面々が、商業においてはいわば素人の士族であったことも経営を悪化させた要因のひとつであろう。

### 玉光山陶器製造場（現沈壽官窯）の創業

十二代沈壽官の創業は、苗代川陶器会社の資金繰りが滞った時期にあたっている。そもそも沈壽官は苗代川陶器会社の工長であり、ウィーン万博に出品する薩摩焼の輸送方として上京した。沈家に残る「萬留」によれば、明治5年10月に出発、事前公開が行われた東京の山下博覧会場に陳列をすませた後も、各地の陶器製造家らと交流し、輸出品について討論するなどして滞在を続け、帰郷したのは明治7年2月以降のことである。

帰途についた沈壽官が独立を心に期していたかはわからないが、少なくとも海外輸出に向けて大きな希望を抱いていたのではなかろうか。しかし実態は正反対であった。この状況が沈壽官の独立への決意を促したとも考えられる。

明治7年、沈壽官は苗代川陶器会社を辞して製造場と窯一基の建築に着手、翌8年、玉光山陶器製造場を創業した。沈壽官は創業の決意を「数多の職工が業を離れ、生計の道を失う事態は遺憾に堪えない」とし、「自ら陶器場を建築し、玉光山と号し、職工を再び業に復す」と記している。離散した職工らの受け皿になったのである。

### おわりに 西南戦争の影響

開業当初の玉光山陶器製造場はどのような状況であったのだろうか。沈家に残る記録には、信用が回復し販路拡張の状況となるのは明治11年頃のこととある。この年弟の沈壽誠が上京、明治13年には東京支店を開いた。つまり西南戦争を経て、本格的に経営が軌道に乗ったと考えられる。

一方、苗代川陶器会社には明治9年3月、政府から救いの手が差し伸べられた。勸業寮の納富介次郎と両角寛らが来鹿、両角が苗代川に詰めて再建が図られていたが、西南戦争の勃発により両角が帰京を余儀なくされ明治10年10月に倒産した。

こうして薩摩焼の発祥以来続いた藩主導の生産体制は終わり、沈壽官ら個人経営による生産の時代が到来するのである。

また、大久保が西南戦争中、推して開催した内国勸業博覧会（8月21日～11月30日）に、鹿児島県は全国で唯一出品できなかった。西南戦争が薩摩焼をはじめとする産業に大きな影を落としたことは間違いあるまい。今後の検証が期待される。

<主な引用・参考文献>

- ・萩原延寿著『遠い崖―アーネスト・サトウ日記抄』12・13（朝日新聞社、2001）
- ・『幕末維新を駆け抜けた英国人医師―甞るウィリアム・ウィリス文書―』（創泉堂出版、2003）
- ・『薩摩藩文化官僚の幕末・明治：木脇啓四郎「萬留」-翻刻と注釈』（岩田書院、2015）
- ・日本史籍協会叢書34『大久保利通文書七』（東京大学出版会、1928）

## ウィークリーミュージアムガイド

黎明館では、毎週日曜日に展示解説員が常設展示の展示解説を行っています。

第1・3・5週は「歴史・文化コース」として、展示解説員が選んだテーマで解説を行っています。ある分野に特化したものや、季節やイベントにちなんだものなど、展示解説員の個性が光るバラエティ豊かなラインナップとなっています。また、第2・4週は「御楼門コース」として、鹿児島城や御楼門にフォーカスした解説を行っています。

8月17日に行われたウィークリーミュージアムガイドでは、高橋解説員が「島津家歴代当主の中であなたのイチ推しを選ぼう!」と題して、島津姓の由来や島津家の当主について解説を行いました。



ウィークリーミュージアムガイド

毎週日曜日 11:00 ~ 12:00 (常設展示入口に10:55集合) / 参加料: 常設展示団体入館料 / 途中参加・途中退出OK / 予約不要  
解説の内容は黎明館HPの各月の催し物に掲載しています

参加お待ちしています!

# 活動報告

## キッズフェスタ

8月24日に夏休み中の小学生を対象とした恒例イベント、「キッズフェスタ」が行われました。今年は御楼門復元から5周年ということで、鹿児島城をテーマに、すごろく遊びや展示解説を行い、小学生とその保護者総勢36名が参加しました。イベントの運営には博物館実習中の実習生も加わりました。初めは緊張した面持ちでしたが、次第に参加者と打ち解け、コミュニケーションをとっていた姿が印象的でした。

小学生の感想

- ・歴史が好きだから、とても満足だった。
- ・鹿児島城のヒミツがわかって面白かった。

保護者の感想

- ・内容がクイズやすごろくだったので、低学年の子どもも参加しやすかった。
- ・鹿児島城についての説明は、大人にとっても勉強になった。
- ・良かったのでまた来年も参加したい。

実習生の感想

- ・子どもたちだけでなく、保護者とも話す機会があり、勉強になった。
- ・子どもたちが大人と一緒に学んでいる様子が見られた。黎明館で夏休みならではの経験ができたのではないかなと思う。

